

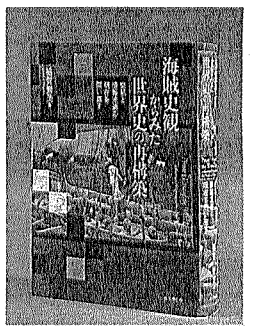
ハッキングから偽ブランドまで

「海賊」新たな世界像探る

海賊という言葉の射程は広い。海洋上での略奪行為という文字通りの意味から、インターネットの海で繰り広げられるハッキングや知的財産の侵害、さらには「海賊商品」と呼ばれる違法コピー、偽ブランドまで。40本の論文を収めた大著「海賊史観からみた世界史の再構築」(写真)は、こうした秩序からの逸脱をただちに断罪するのではなく、横行の要因や背景に目を向けることで、新たな世界像を探ろうと試みる。

(阿部秀俊)

「海賊史観からみた世界史の再構築」



編者の稲賀繁美・国際日本文化研究センター教授は「従来の法律感覚や国際秩序の常識がもはや通用しなくなっている」ことを出発点に据えたという。無料動画サイトやダウンロードの流行、仮想通貨「ビットコイン」の流通など、新しい技術に既存の法律やルールが追いつかない中、「思わぬ事件が発生してから、あたふたと後追いつけるばかり。私たちは、犯罪の意思がないのに脱法行為へと導かれ、処罰されかねない環境に生きている」と指摘する。

「海賊史観からみた世界史の再構築」は、インターネット上のアクセスを防ごうとしたネット上の無名のユーザーたちに光を当てた。贋作や模造品の流通を探った第2部では、立命館大の小川さやか准教授がタンザニアのインフォーマル経済を考察している。コピー商品の交易がグローバルに展開する経済状況について、「ブランド企業の知的財産権を脅かしているかもしれないが、発展途上の貧困層の物質的な基盤、豊かさを、部分的には実現している」との見方を示し、多国籍企業などが先導す

40論文、多様な切り口

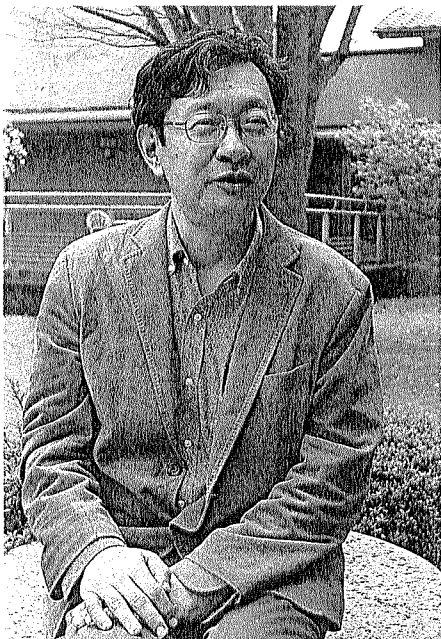
る主流派のグローバル経済と対置してみせた。稲賀論文は「大航海時代」から問い直す。1494年のトリデシリアス条約について「スペインとポルトガルで地球全体を山分けしようという、とてつもない海賊行為だった」と説き、そもそも「近代の世界体系は、海賊行為が形作った」として語弊ないとした。

ネット上のファンによる自発的な「マンガ翻訳」や、「人魚のミイラ」から説き起こす「イカサマ商売の源泉」、あるいは「京都における人と野良猫の関係史」など、収録された論文は、多様な切り口から海賊を考える。編集にあたって稲賀教授は極力、書き手たちの自由を重視したようだ。「海賊船の船長よろしく、いつ捕縛され、船から突き落とされるかわからないスリルを味わった。ただ船員が船長の命令を無視してもよいという環境によって、予期せぬ成果や生々しい現実のルポを収録することができた」と、論文集自体が「海賊的」

「たくらみだったことを明かす。物事を法律や規則の枠組みにはめ込むことが正義だとされる風潮に対し、「そうした受け身の姿勢、迎合的な選択だけでは、国際社会の荒波で

は通用しない」とみる稲賀教授。既存の国際秩序や国民国家の枠組みが揺らぐ現代にあつて「やみくもな正義感や、性急に普遍的な善を求める態度は、かえって世界にさまざまな矛盾を生む。海賊行為と

して表面化する秩序の破れ目、ほころびが、なぜ生じているのかを考えないといけない」と警鐘を鳴らす。「海賊史観からみた世界史の再構築」は思文閣出版、1万5120円。



「善悪を一方向的に決めつける前に、どのようなゲームの規則が働いているのかを見極めることが不可欠だ」と語る稲賀教授(京都市西京区)

文化